

独裁政権に幕を下ろしてから14年。最近は日本系企業を含む海外からの投資ラッシュで一気に名をあげるようになりました。しかし、経済成長は超格差社会の確立を助長しています。貧困層は、人口2億4千万人の半数近くにも達すると言われ、富豪トップ40人の総保有財産は最貧困層6千万人の財産とイコールという調査報告もあります。



首都ジャカルタと周辺都市圏の総称ジャボデタベック(ジャカルタと周辺4都市ボゴー、デポック、タンガラン、ブカシ市の頭文字から成る)は、人口2千800万人という世界第4位のメガシティです。多数派が暮らす住居の家賃は月に1万円前後、給湯や建物内の下水が整備されているなど、利便性を重視すると家賃も一桁以上アップします。暮らしも桁違いに変わり、格差が生まれます。中流層以上の家庭ではメイドを雇い、家事全般から子守りまですべてを任せることが多く、さらに富裕層は警備員と女中を同居させています。

熱帯性気候で一年中が常夏。ジャングルのなかの大都市は熱気と湿度が入り混じっています。雨季の終盤となるこの4月には大雨が続き、あちこちで深刻な浸水被害が発生しました。インフラが整備されていないほとんど

世界の子どもたち

Part II

本シリーズは、フォトグラファー中西あゆみさんが「世界の子どもの生活とあそびの今」をタイムリーにレポートします。

写真・文 中西あゆみ

ジャカルタに生きる=ジャボデタベックでの暮らし【1】



インドネシア



の居住地域では、汚水が一緒に近くに近所の川に流れます。ごみで溢れ返った道や川が氾濫して洪水を引き起こすという悪循環。デング熱やマラリヤが流行する劣悪な住居環境に住民は悩まされていますが、政府が手を差し伸べることはありません。

高層ビルや高級マンションが立ち並ぶ大通りの裏側には、トタン屋根のスラムが広がっています。近年物価も上昇し、都心での暮らしは大変です。その地域に暮らす子どもたちの生活にも直接影響します。貧困から、自ら家を出る子どもたちも多く、ストリートキッズの数は、少なくともジャカルタだけで1万人以上と言われています。駅に住みつく子どもたちもちらりとあります。デボック駅では、小学生以下の若い住人たちが、日々、電車の掃除や乗客の荷物運びなどで生計を立てています。

この土地で生き残るために、どんなことでも「商売」にしてしまう人々は堅忍不撓です。子どもたちも同様にその責務を担っています。

一日中排気ガスにさらされ、渋滞のなかJITainerする車を誘導する仕事は一回10円。雨が降つたらさっと傘を差して一緒に歩いてあげるサービスは数十円の稼ぎになります。満員電車のなか、カラオケマイクで演歌を熱唱する女性の若い子どもは、一曲ごとに乗客から料金を集めています。

ブカシ市のバンタール・グバンごみ処理場には、ジャカルタから出る一日6千トンものごみが一挙に集められます。そこでは再利用可能な資源ごみを収集し、業者に売ることで生計を立てる人々とその子どもたちが働き、暮らしています。幼い子どものほとんどは短パンにゴム草履などの軽装でごみ山に入ります。刺激と熱気に満ちた暮らしは、そこで生きる人たちの活力となり、都市全体のエネルギーを生み出しています。同時に、たくさんの不条理が確実に人々の寿命を縮めている現状。この土地に暮らし、希望と危機感が交錯する毎日です。



3



2



5



4



7



6



©Sameer Al-Abdullah

中西あゆみ

フォトグラファー

東京出身。米国でフォトジャーナリズムを学ぶ。2010年よりインドネシアのジャカルタを拠点に活動。現在ドキュメンタリー映画を作成中。